リリなの×Fate　　（嘘予告）

ラフ自称可

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリなの×Ｆａｔｅ　（嘘予告）

【Ｎコード】
Ｎ７３１１Ｋ

【作者名】
ラフ自称可

【あらすじ】
続かない予告。Ｆａｔｅの絵の人がなのは描いたの見て気が付いたら書いていた。後悔はしていない、反省はしている。

燃え盛る火の海の中。一人の少年が歩いていた。

身なりはボロボロで、所々服が破けて露出している肌からは血が流れているのが見える。

突然の火の手。なぜ燃えたのか解らず、何が燃えたのかも解らない。ここが何処で自分が誰かも、誰とここに来たのか、なんのために来たのかも思い出せなかった。ただ、この中で意識があり、さほど傷を負ってない自分は幸運だと思った。

周りが静かな事に気付き、立ち上がって周りを見渡した。
見えたのは、どこかしらが欠けたもう動かない人達と、瓦礫の山。
転がっている人は腕や足、中には腰から上が見えない人も居た。そのうちの一人の上に瓦礫が崩れ、何かが潰れる音だけして、叫ぶ声も無く物音が消えた。

とにかくここから離れなければ。そう思い比較的瓦礫の少ない方へ歩き出した。

もうどれ程歩いただろう。歩いても歩いても景色は変わらず、見えるのは瓦礫ともう人ではなくなってしまったものだけ。

すでにその歩みは歩くと言うには少々早さは足りず、どちらかといえば這いずると表した方がいいだろう。
その歩みからは疲れだけではなく、絶望すら滲ませる。
しかし少年は歩みを止めない。だって、止まってしまえばもう二度と歩けなくなる。何より自分は生きないと。ここに来るまでに見捨てた人達の分まで。

だがもう少年は限界だった。体はもう一歩も踏み出せそうになく。心も折れそうだ。そしてとうとう倒れた。うつ伏せよりは仰向けの方が楽だと思ったのか、必死に寝返りを打とうとするが、それすらも容易ではなかった。

何分、何十分、どのくらい掛かったのかは分からないが、ようやく空を見る事が出来た。
空は果てなく紅く燃えていて、視界の端には建物だったと思われる瓦礫が見える。

漠然と、ああ、自分はここで死ぬのか、と考えた。生きる事が出来ないのは悔しいし、まだやりたい事だって、今は思い出せないがあったはずだ。

何よりここまで来るまでに見かけた、まだ生きていた人達。その人

達の声を耳を塞いで歩いてきた。助けを求めて差し伸べてきた手を振り払ってきた。他人を見捨てて、自分はここまで来た。

ならば生きなければ。見捨てて来た人達の為にも。今は顔も思い出せない家族の為にも。

だが、如何に心を強く持とうとしても、体が動かない。元々怪我をしていたものを無理に動かしたからだろう。腕一本、指一本すら、もうピクリとも動かせない。

次第に仕方ない、そう思えてきた。だってそうだろう？大の大人すら何も出来ずに、中には気付く事も無く動かなくなった。子供の自分がここまで来れた事だけでも奇跡だろう。

そう思い、諦め、目を瞑ろうとした少年の顔に、何か冷たい物が落ちてきた。

目を瞑ることを止め、空を見てみる。未だに空は紅いが、雲がかかり雨が降ってきた。よかった。これで少しは火事も収まるだろう。そうなれば他に燃え広がる事も無い。

「…は…はは…」

自分が死にそうなのに、他人を心配している事が可笑しくなり、つい笑い声が出た。

最後に笑えた。本来の意味とは違うけど、死ぬ前に笑えた。それに、

もう疲れた。
だから…もういいよね。

そう誰に言う訳でもないが、口に出し、瞼を閉じようとする。

するとまたもや、物音が聞こえてきた。今度は人の歩いて来る音だった。
しばらく同じペースで、ゆっくりとした様子だったが、突然足音の感覚が短くなる。
何か見つけでもしたのだろうか。その音は心無しかどんどんこちらに近づいている気がする。

そして自分のすぐ傍で音は止まり、体が持ち上げられる感覚がした。

「…まだ…生きてるっ…よかった。本当に良かった…っ…」

心底嬉しそうな、どもったような声が気になり、また瞼を開く。

見えたのは少し色の薄くなった紅い空と、泣きそうな、それでいて凄く奇麗な笑顔だった。

その景色を最後に、少年の瞼は下がっていった。

鼻に付く独特の匂い。それと何かが擦る音に目を覚ました。
まず見えたのは白い天井。ここが何処かを考えるより先に、傍に人が居る事に気付く。
その人物は、自分が起きた事に気付いたのか、話しかけてくる。

「おや、もう起きたのかい？どこか痛い所は？」

そう取り乱すのではなく聞いてきたのは、黒っぽいスーツを着た、まだ若い男の人だった。
なぜここに居るのか、あなたは誰なのか、そう聞きたかったが、相手の方が先に聞いてきたので、とりあえず答える。

「…別に。痛い所はないし、お腹も空いてない。」

「ははははっ。そうか、それは良かった」

痛い所が無いのは麻酔が効いてるからだろうねという言葉の後に、ここは病院だと聞く。
じゃあ、この人は誰なんだろう、もしかして自分の家族かもしれない。そう思い話かけてみた。

「…お兄さん、誰？僕の家族？」

「お兄さんって…おじさんでいいよ。残念だけどおじさんは君の家族じゃない」

「じゃあ、親戚？」

「いや？親戚でもない。君と僕は血縁…血も繋がってなければまともに会った事も無いよ」

じゃあなんでここに居るんだろう。そう考えさせられた。
不思議そうな顔をしてたからか、おに…おじさんは笑顔で切り出してきた。

「ところで士郎君。君は知らないおじさんに付いて行くのと施設に

入るの、どっちがいい？」

突然。本当に突然だった。本人は前から言うつもりだったみたいだけど。

…士郎？それって誰の事…

そう思って、ここに居るのは自分とおじさんだけだと気付き、じゃあ自分の事か。そう思った。

質問に関しては、目の前のおじさんは、凄くいい人のような気がする。なにより気を失う前に見た、奇麗な笑顔をして自分を助けてくれた人だと思い出した。

施設はなにがあるか解らないし、誰がいるのかも解らなかった。

答えは決まっていた。施設に行くより、この人について行った方がいい。悪い事にはならないだろう。…不思議と、そう思えた。

「…おれ、おじさんについていく」

「そうか」

心底嬉しそうに、どこかほっとしたような表情を浮かべながら、「じゃあ、おじさんの自己紹介から」と、なぜかおれも自己紹介する事になった。

「おじさんの名前は『高町　士郎』っていうんだ。君と同じだね。士郎君。」

そうどこか可笑しそうに言ってくる。おれもつられて

「ははっ、そうだな、同じだ」

なぜ笑ったのかはわからなかったが、とにかく笑ってしまった。

「ちなみに君にはお父さんとお母さん、それに兄妹が三人できます」

先に笑い終わったおじさんが、そう気軽に切り出してきた。

…はい？

「なんでさ……」

思わずそう漏らしてしまった事は、仕方ないと思う。

これが、俺が『高町　士朗』になり、高町家で暮らし始める事になった切っ掛けである。

（後書き）

続きません。ええ、多分。考えなしで三時間じゃこのくらいが限界なんです…

続きは脳内保管でおねがいします。

補足。Ｆａｔｅでは『衛宮　士郎』ですが、高町家のお父さん『高町　士郎』と名前の字も読みも同じなので、『士郎』から『士朗』へ変わりました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7311k/

リリなの×Fate　　（嘘予告）

2010年10月28日05時30分発行